第４２回九州高校放送コンテスト熊本大会　審査員講評

【ラジオ番組部門】

NHK 熊本放送局　ディレクター　佐々木 駿平

未曾有のコロナ禍により、人に直接会って取材をして番組を制作することが難しくなっています。九州放送コンテストでも、例年と比べ当事者への取材が必要なラジオドキュメンタリーが少なく、創作ラジオドラマが多かったことは番組づくりに大きな影響が出てきていることを表していると思いました。そのような状況の中、制作の自由度がより高いラジオドラマではなく、ラジオドキュメンタリーの作品が優勝したことにも大きな意味があるはずです。直接足を運んで取材をして、声を聴くという点で困難も多かったと思います。それでも「伝える」こと、「表現する」ことを諦めずに番組を作り上げた制作者の皆さんに頭が下がる思いです。

一方でラジオドラマ作品にも、審査をしていて驚きがありました。それは認知症やネットいじめ、公害や自殺など社会の中にある問題を描いた作品が多かったことです。それらの社会問題を、ユニークな脚本と構成で見事に伝え切っていました。発想豊かなラジオならではの「音」の表現には感銘を受けるとともに、私自身の制作意欲も駆り立てました。時には自然と目が潤み、もう何回も聴き直した作品も中にはあります。高校生の皆さまの作品に接し、「伝えたいこと」がある時、それを伝える手段はノンフィクションでもフィクションでも関係が無いということを改めて認識させられました。

なぜ私たちは番組をつくるのか、なぜ「伝える」のか・・・。この問いの明確な答えは私の中でもまだ出ていません。でも確かなことは、何らかの思いがあって私たちはつくり、そしてその先に見る人・聴く人が存在することです。様々な制限がある中、作品の制作は苦しく辛いことも多かったと思います。しかし、苦しんだ分だけ、完成後に一人ひとり何らかの“やりがい”も感じたのではないでしょうか。皆さまの素晴らしい作品に接し、私自身様々な大切なことに気づかされました。是非つくることの苦しさも喜びも忘れず、これからも番組をつくり続けてください。皆さまがつくった番組に、またどこかで触れられる日が来ることを願っております。

【テレビ番組部門】

NHK 熊本放送局　ディレクター　伊藤麻衣

世界中がコロナに翻弄された 2020 年、高校生であるみなさんの生活も大きく変わった 1 年だったと思います。3 年間という限られた高校生活、貴重な時間をさまざまな制約を受けながら過ごさなければならなくなってしまったもどかしさを思うと、やりきれない気持ちになります。そんな状況下で若いみなさんが、いま、なにを思っているのか、作品を通してそれを知りたい思っていました。作品を作り上げる中で、これまでできていたことができなくなり、相当な苦労をされたと思います。しかし、手段を奪われた中でできなくなったことを悔やむのではなく、知恵と工夫で新しい武器を増やした人もいたのではないでしょうか。誰もが経験したことのない状況下で立派に作品を作り上げた経験と一緒に乗り越えた仲間は、きっと何にも代えがたいものとして皆さんの中に残るはずです。拝見した作品からは、それぞれの感性でこの時代を切り取り見つめ考えた跡がたくさん見て取れ、うれしい気持ちになりました。映像作品を作る際、何を題材にするかも大事ですが、誰が作るかも同じぐらい大事なことだと思っています。映像という形でなくても、皆さんが感じたことを伝えること、形にしてアウトプットしなくても、感じることを続けて欲しいと思います。毎日暗いニュースばかりで気が滅入りますが、みなさんの作品を見ているとまだまだ大丈夫だな、と思える元気をいただきました。ありがとうございました。これからのみなさんの活躍を楽しみにしています。